書字の困難さ、自閉傾向のある小学６年生の児童への通級による指導を活用した合理的配慮の事例

１．事例の概要

通常の学級に在籍し、通級による指導を活用する小学６年生のＡ児の事例である。診断はないが、書字の困難さ、自閉傾向がある。理解がゆっくりで学力が定着しにくく、板書を写すだけでせいいっぱいとなる。気持ちの折り合いをつけにくく、興奮がなかなか収まらないこともある。独語のつぶやきが多く、思考を言語化してしまい、場に合わない発言をして、他の児童とのトラブルに発展することもある。学びの場としては、支援員のいる通常の学級、習熟度別少人数授業（算数）（10 人未満）、通級による指導（個別）を週２時間と、通級による指導（グループ）を確保している。それぞれの学びの場の教員が役割分担して、生活面では他児とかかわるための適切なソーシャルスキルトレーニング（以下、ＳＳＴ）や言葉の使い方の獲得に向けた指導を、学習面では見通しを立てて取り組み、教科の学びを深める指導を行ってきた。通常の学級や習熟度別少人数授業（算数）で、他児とかかわる場面も増え、生活面・学習面の双方で、Ａ児が落ち着いてきたと感じられる。

キーワード　書字の困難さ、自閉傾向、通級による指導、スクールカウンセラー、ソーシャルスキルトレーニング、独語（つぶやき）

２．児童の実態

Ａ児は、自閉傾向、書字の困難さが見られる。他児と異なる教材等、特別な配慮へは抵抗感が強い。考えたことをすぐに口にしてしまい、他児とのトラブルに発展するときもある。授業中は、見通しが持てなくなるとつぶやきが増え、大きな音を立てて鼻をかむこと、ティッシュの片付け等のマナーが悪いことから、他児が近づいてこない様子も見られる。片付けや整理整頓が苦手で、授業中に不要なノートや道具が机の上にあることが多い。国語の文章読解や作文が苦手である。算数は好きで、５年生までは理解を深めるために積極的に通級による指導を活用していたが、６年生になってから教室で受けたいという希望を持つようになった。

３．本事例に関する基礎的環境整備

○　通級による指導（個別）を週２時間と、通級による指導（グループ）のＳＳＴを月１回活用している。習熟度別少人数授業（算数）は、10 人未満クラスで指導を行っている。学年に１人支援員が配置され、学級での指導に入る。【基礎１】

○　スクールカウンセラーと特別支援教育コーディネーター（通級による指導担当教員が兼務）が授業見学や行動観察を行い、学級担任とも、常に情報を共有している。また、支援員に対しての研修会を学期に１回（年に３回）行っている。【基礎２】

○　視覚での理解の助けとなるように、教科書の絵や図、注目する資料を拡大したコピーを黒板に貼る等の工夫や、書き込みプリントを用意する等、書字の負担を減らし、見通しの持てる授業展開となる教材を作成している。【基礎４】

４．合意形成のプロセス

２年時の担任がＡ児の様子に不安を感じ、特別支援教育コーディネーターへ相談した。その後、担任と特別支援教育コーディネーターと保護者が面談する中で、市の相談機関への相談とつながった。相談機関で通級による指導の活用を提案され、３年時から通級による指導での指導を受けている。ただし、保護者のＡ児への理解は深まらず、通級による指導の活用は消極的であった。６年生になっても、Ａ児の学習や生活の困難さへの理解が深まらない様子ではあるが、通級による指導（個別）では学びを深めること、通級による指導（グループ）は他の児童とのかかわりを学ぶＳＳＴの場であることを、特別支援教育コーディネーターとの面談で保護者に伝え、学級担任からもＡ児の成長を繰り返し伝えることで、通級による指導を継続すること、合理的配慮の提供について、校長を含めた保護者との面談にて、承諾を得た。

５．合理的配慮の実際

○　書字の負担を減らすように、字体への注意喚起はせずに、書く場所や書く内容について評価を行う。考えて自分の意見を書く、発表できることに対して、評価するフィードバックを行った。【合理①－１－２】

○　授業の展開に見通しを持てるように、通級による指導では１時間の流れをＡ児がプリントに記入して展開した。間違えることへのこだわりがあるために、表情やしぐさに注意して、机間指導で教員から声をかける配慮を行った。【合理①－２－１】

○　他の児童とのかかわりは、通級による指導（グループ）から習熟度別少人数授業（算数）、そして通常の学級へと、少人数から大人数へと段階的にＳＳＴができるようにした。【合理①－２－２】

○　養護教諭と市のスクールカウンセラーにより、心身の観察フォルダを作成し、情報として書き込み、教職員が情報を共有できるようにした。【合理①－２－３】

６．本事例の成果と課題

Ａ児はクラスで自分の役割があり、責任を果たしている自覚が生まれ、穏やかな表情でいる時間が増えてきている。また、衛生面のマナーが向上し、他の児童から避けられることが減っている。他児とのかかわりで、気持ちが乱れた場合に、習熟度別少人数授業（算数）の教員や担任にも話すことが増えた。気持ちを振り返って自分の行動を見つめたり、どうしたらいいのかという解決策を考えたりできるようにもなってきた。授業では、教員からの指示が以前より通りやすくなり、集中する時間が増えている。

特別支援教育コーディネーターが中心となり、Ａ児のそれぞれの学びの場の役割を明確にしたこと、週１回、支援員も含めて学年の話し合いを持ち、疑問があれば、すぐに質問できる環境が整えられたことも有効だった。今後も教員間で情報を共有しながら、支援体制と内容を検討し、支援を組み立てていくことが課題である。